

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

僕は香川県善通寺市生まれです。空海さんと同じ土地で生まれたことも手伝って、若い頃から仏教に興味を持ちました。人はなぜ生き、なぜ死ぬのだろうか…医者として幾千もの生死に立ち合ってきましたが、理不尽な死に出会えば出会うほど、答えがわからなくなる。そんな暗闇に迷い込んだとき、そっと開くのはいつもこの人の本でした。

251 宗教評論家 ひろさちや



す。しかし末期になると、骨やリンパ節などに転移し、さらに肝機能が悪く低下するため、全身倦怠(けんたい)感、体重の減少、黄疸(おうだん)、肝性脳症、そして腹水といったさまざまな症状が現れます。

在宅医療は無理なのではと心配するご家族もいます。しかし腹水は、病院で大量の点滴を行ったことが原因で大量に溜まってしまふ場合がほとんどです。一生懸命に抜いてもそれ以上の点滴をしていたらまた溜まります。お腹がパンパンになって苦しうに自宅に帰って来る人がいます。在宅では抜くことはなく、上手に利尿剤を使いながら、自然な脱水を見守り腹水が減るのを待ちます。抜かずにQOLを取り戻すことが可能なのです。

さて、ひろさちやさんの訃報には、「葬儀は行わない」と書かれていました。ひろさんは生前、葬儀どころか、「お墓は不要。遺骨は抜け殻に過ぎない」と散骨を希望されていました。

昔の日本人は、遺骨に関心がなかったぞうで、野ざらしにしました。お墓を重要視するようになったのはここ50年ほど、火葬が普及してからだとか。

以降、日本人は遺骨に霊が宿っていると考えがちですが、仏教では、死者はお浄土にいると考えます。だから遺骨なんておぬけの殻。捨ててしまえばいいんだよ、と。まさに「千の風になって」の世界観です。

「コロナ禍によって、お墓参りに行けなくて悩んでいる人や、墓じまいを考えている人はぜひ、ひろさんの著書を読んでみてはいかがでしょうか。

仏教の教え熟知し散骨希望

仏教の教えを、わかりやすい言葉で日本人に伝え続けた、宗教評論家のひろさちやさんが4月7日、都内の自宅で亡くなりました。享年85。死因は、肝臓がんとの発表です。

肝臓がんでも自宅で最期を迎えられるの?と思われた方もいるかもしれません。もちろん答えは「イエス」です。